

僕は言つたのだ。

「もう家へは歸らない。僕はあなたと結婚したいのだ。

それで宇和島まで、今夜二人で夜逃げをしようか。

しかし疲れてゐるので布團を敷いて呉れませんか。

しばらくねるから、

おぢいちゃんは何處へ行つたの。

豆腐はなければ、買ひに行かなくとも構ひませんよ」

女は餅を焼いてくれたりした。

二三日前、女が書いた手紙をよんで、女が僕と結婚しても好いと言ふ意をホノメカシてゐる様

な氣がした。

僕は肉薄した。

僕をあやつつては不可ない。

精神病者は信じ易く、又疑ぐり深いものだ。